

## 論 説

第26回日本アレルギー学会総会記録を読んで  
ネズ属花粉症の予想

26th Japanese Congress of Allergology (1976) and Pollenosis of Juniperus

静岡大学名誉教授 上野実朗\*

Professor Emeritus of Shizuoka University

Dr. Jitsuro UENO\*

本総会は昭和51(1976)年9月23日より25日まで岩手で行なわれた。その報告はアレルギー第26巻・第3号(昭和52年3月)に記されている。これを一読して特に一般演題(231題)について、花粉学の立場から発言したいと思う。

私は40年間の花粉研究の職業病としてブタクサ花粉症にかかり、私自身を被験者とした報告も出している(八倉1961・中村1975)そこで私は花粉症については関心があり、日本花粉学会会誌にも害草手配書(1970)などを著した。現在も和歌山医大から来静されている宇佐神篤医師と協同して静岡市小鹿の済生会病院で空中花粉を研究中である。その為にこの総会報告も極めて切実に感ずることが多く、出来れば協力したいと思うことも多かった。そこであえて医師でもないが、ここに感想や予想をのべたい。

スギ花粉については演題40などでも問題にされている。私は研究中に一番多量に吸入したのはスギ花粉だが、感化はされていない。いくらスギ花粉を吸っても平気である。皮内反応もマイナスで、RASTもゼロである(1977年7月宇佐神医師テスト)。

キクのアレルギーについては演題166で静岡県西

伊豆地方の例をあげている。原因は花粉でも葉でもないという。中川俊二博士は除虫菊の花粉症を報告されているが、別のケースらしい。この報告の追加発言に原因となったキクの正確な学名を出してほしいとあるのは同感である。

クルミ花粉症(演題171)はすでにアメリカでは常識になっているが、日本でもあった訳である。クルミは花粉生産量はかなり多い。私は数年この花粉を研究したが感作はされなかった。私は害草手配書(1970)でも、クルミを出しておいたが、尾状花序群とよばれる特殊な分類群に属する植物である。この報告に対する質問に、植生上オニグルミとカシグルミ(テウチグルミ)とどちらが多いかとあった。演者は答えていないが、筆者が答えるとすれば、オニグルミは野生種で広く分布しており、カシグルミは栽培種で、特に長野県に多い。信濃グルミというのはカシグルミとペルシヤグルミとの交配で出来たものである。これらの栽培種の分布は狭い。

ブタクサ花粉症(演題172)の結果で特に筆者ら患者にとって見逃せない症例があった。それは花粉シーズン後ブロック・アンチボデー値がシーズ

\* 静岡大学名誉教授 420 静岡市瀬名189

Professor Emeritus of Shizuoka University Sena 189 Shizuoka, 420 Japan

前の5倍となり、臨床的にはシーズンを通じて抗ヒスタミン剤を5錠内服しただけで済み、例年になく快的なシーズンを過ごすことができたという。筆者も毎年ブタクサに悩まされているので、このように過したいものである。

東北地方における空中飛散花粉調査(演題173)は東北アレルギーの会・花粉研究会10余名の労作である。東北6県、13ヶ所における1年間の調査結果で、南と北とでは1ヵ月程の開きがある。一年間の花粉総数と樹木・イネ科・草(ブタクサ・ヨモギ)などの記録である。秋田県岩城町の砂浜で4-5cm位のブタクサがあるという。この種の調査は国立療養所南福岡病院を中心とした西日本の報告とともに将来は日本の花粉地図の基礎となる重要な報告で、将来さらに充実してほしい。

日本列島の空中花粉(演題174)は昭和50年2月結成された厚生省医務局空中花粉調査班による全国的な調査である。中心は前記の南福岡病院の勝田満江医師らである。ここは筆者もかつて見学したが、各地からのサンプルが山をなし、岩崎眞由美(薬剤師)が熱心に整理しておられた。その時からすでに数年たっており、熱心な同氏はさぞ花粉判定に熟達したことと思われ、喜びにたえない。とくにこの報告は空中花粉調査から花粉症の発見につながる可能性を示す意味で重大である。またいまひとつの新知見として空中花粉前線なる用語で示された事実がある。マツ・スギなどの木本花粉のシーズンは北上し、ヨモギ・イラクサなどの草本花粉のシーズンは南下するという。

スギ花粉症については演題175でもふれているが、特に注目したいのは、スギ花粉症におけるヒノキ科花粉の意義(演題176)である。スギ花粉症患者の鼻と眼の症状はスギのシーズンが終ってもなお持続し、ヒノキのシーズンまで続く。またスギに感受性の強い人ほどヒノキ科花粉にも同時に強く感作される傾向がある。RASTなどのテストの結果スギとヒノキは明らかに共通した抗原性をもつが、サワラはスギ・ヒノキより低いと考える。スギに感作さ

れた患者がヒノキ科花粉によってもしだいに感作され、長期にわたり臨床症状を呈するものと推測される。今後、地域的(例えば東北地方)でヒノキ科花粉症が発見される可能性を暗示するものとする。筆者の疑問はヒノキ科花粉症の原因がヒノキ・サワラだけであろうかということで、これについては後述する。

スギ花粉症の報告は演題177および178にも見られる。178ではスギ花粉を弱アルカリで処理すると、細胞壁がほぼ完全に破壊されて細胞内容が遊離してくるとある。これは破壊ではなくて、外皮が裂けて内容が脱皮することで、細胞壁つまり花粉膜は強酸・強アルカリでも破壊されることはない。花粉の細胞壁は化学的にも物理的にも極めて強固である。したがって細胞内容を取り出すだけならば外皮を脱皮させる工夫をすればよい。

以上の報告を読んで、第25回日本アレルギー学会総会(昭和50年10月)を省みると、一般演題237の中で花粉関係は次の如くである。カラムシ花粉喘息(演題52)はイラクサ科の花粉症としては最初の報告である。アカマツ・ヨモギ花粉症(演題53)ではマツは無害と考えられていたが矢張り感作された患者がいた訳である。筆者はヨモギの皮内反応はプラス(強)であったが、RASTではゼロであった。除虫菊花粉症(演題54)は筆者も和歌山県箕島地区で調査したことがあるが、この報告では山口県合島の調査結果である。注目したいのはケヤキ花粉症(演題55)である。患者はニレ科花粉エキス(ケヤキ・ハルニレ・アキニレ・アメリカニレ)の皮内反応でも強陽性であった。しかしアメリカではニレ科は抗原植物とされている。日本でも患者がいた訳である。この点からアメリカの抗原植物は見直されなければならないまい。イタリアン・ライグラス花粉喘息(演題56)はイタリアンライグラス・ドクムギとカモガヤ花粉の吸入により発症したものと考えている。盛岡市における2年間の空中飛散花粉調査(演題111)では木本・禾本(イネ科)・草本(ヨモギ等)の3シーズンに分けて報告している。この報告を基礎にして

昭和51年・第26回総会の演題173が報告された。重要な資料である。演題112は九州、沖縄、中国、四国地方における空中花粉についてであり、昭和52年度報告としては日本列島の空中花粉(演題174)と展開している。以上の如く昭和50年10月の第25回日本アレルギー学会総会では7件の花粉症関係の報告が、昭和51年9月の第26回総会では10件ある。花粉症が重視されてきた意味で、まことに喜ばしい。

筆者は花粉症についての報告(1953)を出して以来、害草手配書(1970)、害草手配書補遺(1971)、抗原・花粉図譜(金原書店・印刷中)、花粉学研究(風間書房・印刷中)と花粉症についてのレポートを書いてきた。また日本アレルギー学会評議員でもあるので、その総会記録には特に関心があり、出席の代りにここに発言したい。

筆者は従来、裸子植物松柏類の花粉を研究してきた。スギ科として日本で産するスギ以外の植物はコウヤマキ(高野嶺・和歌山県高野山)に野生。その他は少し栽培。日本特産(筆者はスギ科とはせず、むしろコウヤマキ科にしたい)とコウヨウザシ(広葉杉属・中国原産。当・人家で植栽)だけである。スギが問題ならコウヨウザシも問題とすべきであるが、いまだに注意する医学者は皆無である。また第26回演題176で注意しているヒノキ科であるが、ヒノキ科は日本ではヒノキ属(サワラはこれに入る)、アスナロ属、コノテガシワ属(ニオイヒバはこれに入る)だけとする説と次の諸属を入れる説があり、筆者はこれに花粉形態の上から同意する。その属とはネズ属(ネズ・ネズミサシ・ハイネズ・ミヤマネズ・イブキ・ハイビヤクシン一名ソナレ・ミヤマビヤクシンはこれに入る。すべて野生種)ほか外国産の4属である。ヒノキ科の花粉は1偏孔を有して、すべて同形で区別しにくい。したがってヒノキ・サワラと同定しても、ネズ属である可能性もある。花粉の直径も30ミクロン前後である。

そこでネズ花粉症の可能について考察する。マウンテン・シーダーはアメリカでは南ミズリー・アーカンサス・テキサスなどで、12月から1月にかけて

重視されている抗原植物である。小灌木から10メートルの樹木となり、時には30メートルの大木にもなる。この木は雌雄異株でメスノキとオスノキとがあり、抗原の花粉を放出するのはオスノキである。メスノキは漿果をつける。ホリスター・スタイヤー研究所の抗原植物図譜をみるとイブキ(カマクライブキ)またはミヤマビヤクシンと似ていて、ネズより葉が短い。しかし一応ネズ属として一括、ネズ花粉症と仮称する。アメリカでは前記のマウンテン・シーダー以外に、メキシカン・シーダー、ロック・シーダー(岩地に生える)、オザーク・ホワイト・シーダーともよばれている。学名はネズ属を示すジュニペラスで、*Juniperus mexicana* または *Juniperus sabinoides* である。シーダーは本来はマツ科セドラス属で、有名なヒマラヤ・シーダーがこれに属する。しかし俗にヒマラヤ・シーダーを誤訳して、ヒマラヤ・スギとしたので、スギ科と誤解している人が多い。そこでその誤解をさらにマウンテン・シーダーに適用して、ヤマスギ、つまり山杉と早合点し、アメリカにもスギがあるものとした。スギは日本特産の名木で、アメリカにもヨーロッパにも野生はない。

さてアメリカのマウンテン・シーダーがマツ科でもスギ科でもなく、ヒノキ科ネズ属であることは明白となった。そこでヒノキ科で花粉症をおこし得る可能性をネズ属とくにイブキなどで検討してほしいと提案する。花期は4月である。アメリカのマウンテン・シーダーは冬(12月-1月)開花する。マウンテン・シーダーをヒノキ科と図示したのは害草手配書(1970)だけで、ホリスター・スタイヤーではマツ科ネズ属にしてある。イブキが同属の近縁種であるから、日本でもネズ属花粉症を予想できると考える。

ついでにホリスター・スタイヤーの図で花粉症の抗原植物とされているのを列記し、将来の参考に供したい。カバノキ科ハンノキ; ヤシヤブシ; カバノキ。ブナ科カシ; ナラ; クヌギ。ヤナギ科ヤナギ; ポプラ。カエデ科ネグンドカエデ。スズカケノキ科セイ

ヨウスズカケ(街路樹に多い)。ニレ科アメリカニレ一名シロニレ(春開花)。クルミ科クルミ。ヒノキ科マウンテン・シーダー(ネズ属イブキ)。このほかトウダイグサ科トキシコデンドロン(仮和ドクツタ)があるがウルシににてかぶれる木である。草本としてはキク科ブタクサ; オオブタクサ(クワモドキ); ヨモギ; オナモミ; イバ(和名なし)。ヒユ科ヒユ; アオビユ。アカザ科シロザ; ハマアカザ; ハマアカザ。タデ科スイバ; ギシギシ。オオバコ科オオバコ; ヘラオオバコ。イネ科カモガヤ(オーチャードグラス); ナガハグサ(ケンタッキー・ブルー・グラス); スズメノカタビラ(アヌアル・ジューン・グラス); モロコシ(ジョンソン・グラス); ギョウギシバ(バーミュダ・グラス, デビル・グラス); ドクムギ(イタリアン・ライグラス); アワガエリ(チモシー); チャヒキ(スモース・ブローメ, ブロンコ・グラス);

ウシノケグサ(サルト・グラス); クサヨシ(リード・カナリー・グラス); カモジグサ(カツキ・グラス); モロコシの一種(ベルベット・グラス); カモジグサの一種(ウエスタン・フイートグラス); カラスムギ(ワイルド・オート); ヒロハウシノケグサ(ミドウ・フエスキユ)などである。この中から将来、日本でも花粉症の抗原植物が発見されるかも知れない。この拙文に対する質問を歓迎します。

追記: この小文に対して、宇佐神博士から有力な助言を頂いたのでここに記して、謝意を表したい。氏はスエーデン製のネズ属ビヤクシンのディスクを用いてRASTを10余名について試みたが、すべてマイナスであったという。したがって日本人についてネズ属花粉は抗原とはなりえないのではないかという考である。しかしより多くのデータをさらにつみかさねて探求してほしいものである。

## ☆ 昭和52年度総会報告

- (1) 会計報告 【収入】 前年度残金 130,840円 小塩報恩会寄付 200,000円 三木幹事寄付 20,000円 会費(130名) 390,000円 バックナンバー売上 6,000円 利子 5,040円 小計 751,880円 【支出】 会誌 18号 416,000円 同送料 5,040円 会誌 19号 189,600円 同送料 2,600円 大会費 50,000円 小計 663,240円 【残金】 88,640円。
- (2) 幹事は全員留任(2年間)とする。
- (3) 会則の一部を改正し、会則6条の後に「編集委員」を追記する。編集委員は幹事会で定める。当分は編集委員長は上野実朗、編集委員は幾瀬マサ・徳永重元とする。
- (4) 来年度(昭和53年)の第19回大会の世話は花粉研究会(京都)に交渉中(11月中旬の日曜を希望)。なお大会の講演申込切は53年5月末です。遅れずに申し込んで下さい。会誌20号(昭和53年5月末切)に間に合せて、プログラムをつくりたいので是非ご協力下さい。